日本建築学会大会学術講演梗概集
（東北） 2018 年 9 月

# 台湾濁水系流域中継港＜西螺＞の成立・展開・変容　その４
## 1920 年代以降の延平路街尾の開発形態

正会員　青井　哲人 *　正会員　寺内　達也 **　正会員　陳　顥禎 ***
同　河野　紗輝 **　同　保川　あづみ **　同　辻原　万規彦 ****
同　今　進太郎 **　同　相川　敬介 **　同　恩田　重直 *****
同　杉本　まり絵 **　同　○武田　峻哉 **

台湾濁水渓流域　延平路　街屋（店屋）
西螺（雲林縣）　市区改正　三合院

### 1　はじめに

前稿では西螺旧街の街頭について報告した。本稿では焦点を街尾に移し、地籍圖・土地台帳・共有人連名簿による土地所有の再編過程を検討し、建物実測調査の成果をあわせてこの地区の土地開発の特質を明らかにする。

### 2　街尾の都市構造と土地所有の変遷

1925 年の地籍圖をみると、延平路の北に並走する古い土地境界線があり、これに沿って南と北に町屋が立つような狭長な地割がみられる。地番や土地所有者からみても、この線がかつての延平路であって、狭隘かつ緩やかに蛇行していたとみられる。また北進すると西螺大橋につながる建興路も、1925 年以前に拡幅されている。こうしたことから、西螺では、主要道路については 1935 年の市区改正事業を待たずして既存の地割りを切り裂いて通されていたとみてよい。

建興路以西の地割（図 1）に注目すると、建興路に沿う土地は間口 12 ～ 15m ほどで、三合院を構えることができる地割である。所有者は廖や林といった西螺の地主層の姓が多い。主要道路に面していない他の土地は東西約 20m、南北 70 ～ 170m であり、それぞれに異なる地主が大きく所有している。これはかつて西螺市街西方に広がっていた農地の地割りの名残であろう。

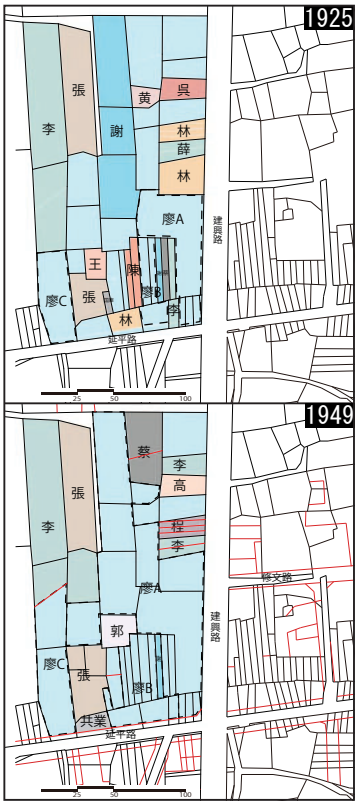


図 1　街尾の土地所有
（虎尾群西螺地図謄本一二葉之内第七號より作成）

1949 年の地籍圖をみると、市区改正によって延平路が拡幅されるとともに修文路をはじめとして西螺都市計画図（1935）に描かれたグリッド状の道路が建設されはじめていることがわかる。

土地所有をみると当時不動産業を営んでいた廖 A（連名）は周囲の土地を購入し、1925 年時の約 2 倍に及ぶ土地を所有しているほか、貸金業を営んでいた廖 B も周囲の土地を購入し、前述した細かい地割は事実上大きなひとまとまりとなっている。延平路沿いは 1925 年から存在する間口 3 ～ 5 間程の土地を寥・謝・張・李・林で共有しており、土地を切らずに各間を分配したものとみられる。他にも張氏、廖 C は敷地の奥行きを広げ、廖 C に土地を売った李氏は近くの廖姓の土地を購入するといったこともみられる。これらは修文路の延長を見越した土地所有者間の動きを物語るものだろう。

### 3　延平路街尾の建物形態

筆者らの調査対象（図 2）は現在四囲に道路が走り、閉じた街区となっている。延平路・建興路の面路部には奥行きの浅い連棟式街屋が並び、延平路では町屋の背後に三合院や洋風の邸宅などが建つ。以下は、前述した廖 B・張・廖 C が所有する屋敷地の実測調査報告である。

図 2　街尾の現状　（google map 航空写真より作成）

### 3-1　廖 B（延平路 254-258）

面路部は市区改正による道路拡幅にあわせて 1936 年に建て替えられた 3 間連棟街屋で、聞き取りによると周辺に木造二階建ての街屋が立ち並ぶなか、当時では唯一の RC 造三階建てであったという（図 3）。建設当時は医院を営んだが、現在は中央 1 階を親族の議員事務所と

**Development of Sailê(Xiluo), a junction port in the Lôchúikhoe(Zuosuishi) River Fan, Taiwan,Part 4**
Development of Koe-Be(town's tail) District of Iânpêng-lō(Yanping Road) since the 1920's

*Akihito AOI　**Tatstuya TERAUCHI　***CHEN Yin-Chen
**Saki KONO　**Azumi YASUKAWA　****Makihiko TSUJIHARA
**Shintaro KON　**Keisuke AIKAWA　*****Shigenao ONDA
**Marie SUGIMOTO　**Shunya TAKEDA

し、中央２～３階を居室としている。

後方には町屋５間分ほどの幅に広がった敷地に 1922 年建設の煉瓦造三合院を構える（図４）。この三合院が位置する土地が廖 B が取得し、のちにまとめてひとつとした土地である。正身中央の正庁前方に拝亭が突き出すのが特徴で、その石柱などの材料は中国から運んだという。赤瓦で葺かれた屋根や、豊かな装飾の施された正庁も、伝統的な建築意匠への拘泥がうかがえる（図 4）。現在ではほとんど部屋は物置となり、祖先と神明を祀る正庁だけが開かれている。さらに左護龍は屋根が落ちてしまい、辛うじて鉄骨で補強されている。

図 3　延平路 254-258　正面

図 4　三合院部分

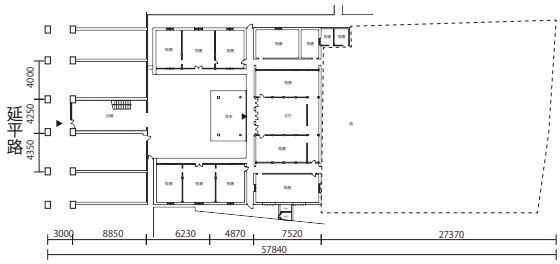

図 5　延平路 254-258 号　1 階平面図

### 3-2　張（延平路 266-274）

五間連棟街屋の後ろに三合院形式に近い建物と中庭の構成を反復して、計四進の建物群を構成しており、建物各部の所有については一族間の取り決めによる。一進目の街屋は竹造平屋建てで、腰まで煉瓦を積む。用途は住居や商店など様々である（図 7）。二進目より後は煉瓦造で住居となっているが、入口は延平路沿いだけでなく、東側に北進する路地を通って奥からもアプローチできる。面路部から後方へ進むごとに材料や構造形式が異なり、土地取得や建築の過程を物語るようである。

図 7　街屋内観

図 8　中庭

### 3-3　廖 C（延平路 278-286）

煉瓦造二階建ての五間連棟街屋と、その後方の洋風邸宅で構成される。街屋部分（図 10）は間口 4000-4200㎜、

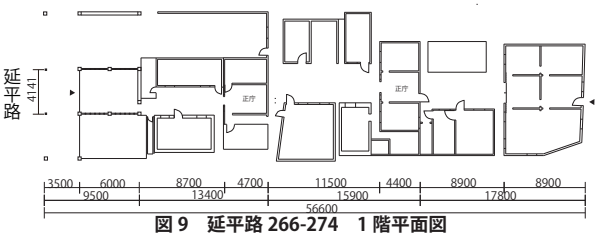

図 9　延平路 266-274　1 階平面図

奥行き 15,900㎜であり、市区改正による切断後にファサードを付け替えた痕跡が残る。大きな中庭を挟んで建つ洋風邸宅は延平路と修文路の二方向に入口を持つ。1 階中央には神明庁があり、これを通る南北軸に対して左右対称に房間（寝室）が配される点は漢人の伝統的邸宅の形式性を残すが、2 階はこの南北軸上の大きなホールを中心に、床の間・押入れ・欄間などの日本的な設えをもつ室で構成されている。外観の洋風意匠を含め、折衷的な住宅である（図 11）。

図 10　延平路 278-286　正面

図 11　和室

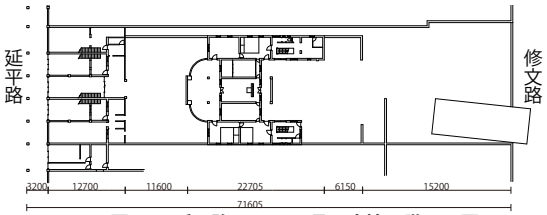

図 12　延平路 278-286 号　廃墟 1 階平面図

## 4　むすびに

以上、本報告（その 1 ～ 4）では濁水系流域の分流のひとつ西螺溪の中継港として繁栄した西螺の都市変容過程について報告してきた。西螺は筆者らがこれまで調査してきた扇央部の河港都市と比べ械闘や水害が目立たず、分裂や移転の反復に伴う都市形態の洗練が見られないかわりに、自然堤防の侵食による市街西遷パタンが特徴的で、植民地期には新しい土地開発の型を示しながら進んだ西漸の趨勢は顕著である。今後は清朝時代の商人集団の特徴、植民地期の地主層の相互関係などを検討し、都市の社会史的側面を掘り下げたい。

＊本稿は科学研究費補助金基盤研究 (B)「台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から」（代表：青井哲人、平成 27 年～ 31 年度）の成果の一部である。

* 明治大学理工学部建築学科 教授・博（工）
** 同大学大学院理工学研究科 博士前期課程
*** 博（工）
**** 熊本県立大学環境共生学部居住環境学科 教授・博（工）
***** 法政大学エコ地域デザイン研究所 研究員・博（工）

*Professor, School of Science & Technology, Meiji University, Dr Eng. / **Master's Course, Graduate School of Science & Technology, Meiji University / ***Dr Eng. / ****Professor, Faculty of Environmental & Symbiotic Sciences, Prefectural University of Kumamoto, Dr Eng. / ***** Researcher, Laboratory of Regional Design with Ecology, Hosei University, Dr Eng.